



岐阜大学機関リポジトリ

Gifu University Institutional Repository

教職課程を受講する学生は「生徒指導」や「進路指導」をどうとらえているか

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 岐阜大学教育推進・学生支援機構教職課程支援センター 公開日: 2023-10-26 キーワード (Ja): 生徒指導, 教育相談, 進路指導, マルチレベルアプローチ, 反社会的行動, 学級崩壊・授業崩壊, いじめ キーワード (En): 作成者: 古田, 信宏 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12099/0002000057

教職課程を受講する学生は「生徒指導」や「進路指導」をどうとらえているか

国立大学法人 岐阜大学 教育推進・学生支援機構

教職課程支援センター 特任教授

古 田 信 宏

キーワード；生徒指導，教育相談，進路指導，マルチレベルアプローチ，反社会的行動，学級崩壊・授業崩壊，いじめ

筆者が当大学の教職課程支援センターで「生徒指導と進路指導」の授業を担当するようになって3年目になる。教員養成学部ではない工学部や応用生物科学部に所属して教職課程を受講し高等学校教員免許の取得を目指す学生にとって、必須科目である「生徒指導」や「進路指導」はどのようなイメージでとらえているのだろうか。学校においては日常的に行われているこの「生徒指導」や「進路指導」について、この授業の担当者として、どのようなことに重点を置いて授業を進めることがよいのだろうか。このような課題から取り組んだテーマであるが、学生の置かれていた環境によって大きく状況が異なることが明確になった。

1. はじめに

筆者は長年、小学校教員として奉職し、小学校長をもって退職した後、現在の職にある。大学時代に教育心理学を専攻していたこともあり、学校現場や教育委員会等においては、主に教育相談や特別支援教育が分掌とされていた。

学校における教育相談の歴史を概観すると、生徒指導とは対立的に考えられていた時期がある。「集団の秩序の維持のため生徒に厳しく接する生徒指導」と「個性を尊重し、場合によっては校則違反も優しく包み込む教育相談」とは相容れないものであったことは事実である。時には、教育相談を担当していると言うと、「生徒を甘やかすから学校が荒れる」などと、学校の荒廃した雰囲気の原因のように見られた時代もあった。

しかし、平成22年度に文部科学省から発行された「生徒指導提要」*¹では、第1章第1節の冒頭において、

生徒指導とは、「一人一人の児童生徒の人格を尊重し、個性の伸長を図りながら、社会的資質や行動力を高めることをめざして行われる教育活動のこと」

生徒指導は、「すべての児童生徒のそれぞれの人格のよりよい発達を目指すとともに、学校生活がすべての児童生徒にとって有意義で興味深く、充実したものになることを目指す」ものであり、「学校の教育目標を達成する上で重要な機能を果たすものであり、学習指導と並んで学校教育において重要な意義を持つもの」

と定義づけている。

また同書では、第5章に「教育相談」という章を設け、その第1節において教育相談の意義を以下のように述べている。

教育相談は、生徒指導の一環として位置付けられるものであり、その中心的な役割を担うもの

これにより、生徒指導と教育相談の対立に一応の終止符が打たれた。

このことを河村*2、*3は、図1のように表している。

しかしながら、かつて荒れた学校現場において児童生徒を「抑えて」きた教員の中には、教育相談的な見方や対応を受け容れない教員もいる。また昨今、暴力行為の急激な増加により、じっくりと児童生徒の話を聞く心理的ゆとりをなくし、体罰など強圧的な指導をしてしまう教員もいる。

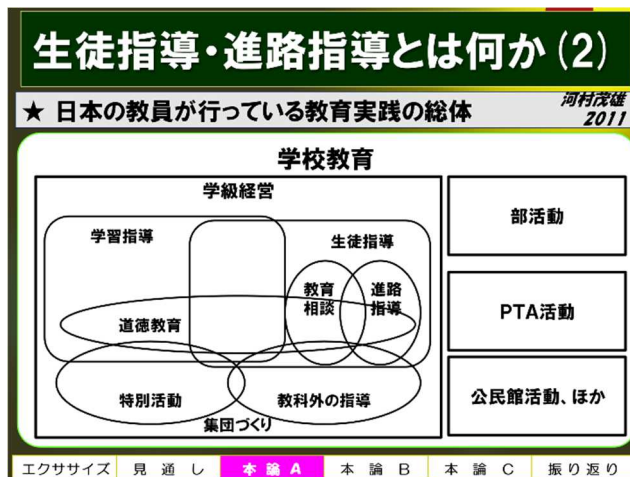


図1 日本の教員が行っている教育実践の総体 (河村茂雄「生徒指導と進路指導」2011より)

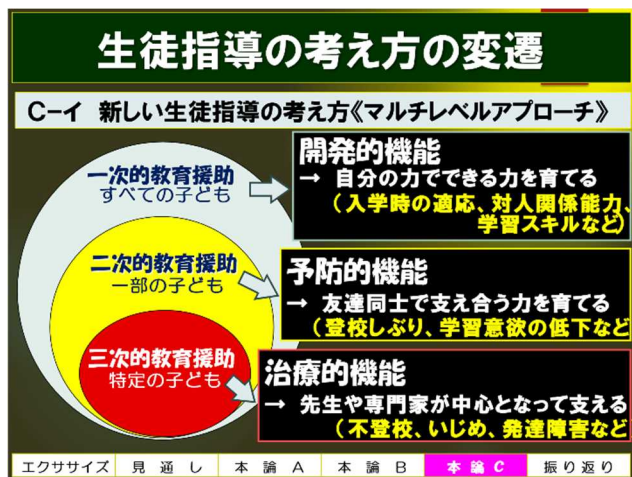


図2 マルチレベルアプローチ (栗原慎二「マルチレベルアプローチ」2017)

こうした中で栗原*3は、新しい生徒指導の考え方として「マルチレベルアプローチ」を唱えている。これは、児童生徒の適応状態によって、大きく3段階での教育援助の在り方に分類して考えようとするものである。このことは、図2のように示される。

すなわち、すべての児童生徒に対する教育援助として、「一次的教育援助」で自分の力でできるように育てる。その中で、自分の力だけではうまく適応できない一部の児童生徒に対しては、「二次的教育援助」として仲間の力を

借りて支え合う力を育てていく。さらに、どうしても個別的な援助を必要とする特定の児童生徒に対しては、「三次的教育援助」として専門的な知見を有する援助者が支える、とするものである。これは、従来の教育相談（あるいは生徒指導）の「開発的教育相談（積極的生徒指導）」「予防的教育相談（予防的生徒指導）」「治療的教育相談（問題解決的生徒指導）」と同じ考え方である。

2. 「自己の振り返り」への取組

では、筆者が担当する「生徒指導と進路指導」の授業を受講する学生たちは、「生徒指導」や「進路指導」に対してどのようなイメージを持っているのだろうか。

生徒指導・進路指導とは何か(1)	
あなたはこれまでに次のような経験はありますか	
Q1 生徒指導を受けたことがある	はい いいえ わからない
Q2 進路指導を受けたことがある	はい いいえ わからない
Q3 生徒指導に関わる授業を受けたことがある	はい いいえ わからない
Q4 進路指導に関わる授業を受けたことがある	はい いいえ わからない
Q5 自分の進路は自分で決めてきたと思っている	はい いいえ わからない

エクササイズ 見直し 本論 A 本論 B 本論 C 振り返り

図3 第1時の「自己の振り返り」

この「自己の振り返り」は、きわめて個人的な体験を問うものなので、学生によっては、問われた体験の有無を答えたくない場合も想定される。そこで、選択肢として「はい」「いいえ」の他に「わからない」も入れた。また、答えたくない設問があった場合は、無理に答えなくてもよいことを口頭で伝えた。

筆者の授業においては、毎回、その授業全体の見通しを持つ段階において、図3のような「自己の振り返り」を実施している。これは、これまで指導される側として受けてきた教育的援助や身の回りの体験などについて、その授業で取り扱うエピソードと絡めて振り返らせるものである。これまで2年間の授業においても実施してきたが、これまでは特に提出を求めなかった。今年度は、授業の最後に書かせる「学修レポート」の裏面に同じものを掲載し、提出させることを試みた。

3. 「生徒指導と進路指導」の受講生の内訳

令和3年度の後学期において、筆者が担当する「生徒指導と進路指導」を受講していた学生40人の内訳は、以下のとおりである。

【所属学部・学科・課程別受講者数】

- 工学部 電子電気・情報工学科 応用物理コース（数学免許取得希望） 8人
- 応用生物科学部 生産環境科学課程（理科または農業免許取得希望） 17人
- 応用生物科学部 応用生命科学課程（理科または農業免許取得希望） 15人

【出身高校の学科別受講者数】

- ・普通科 34人
- ・農業科 4人
- ・工業科 1人
- ・総合学科 1人

【出身高校の所在都道府県別受講者数】

- ・岐阜県 15人
- ・愛知県 18人
- ・静岡県 1人
- ・福井県 1人
- ・滋賀県 1人
- ・奈良県 2人
- ・和歌山県 1人
- ・沖縄県 1人

【出身高校の設立者別受講者数】

- ・県立高校 30人
 - ・国立高校 1人
 - ・市立高校 1人
 - ・私立高校 8人
- ※中高一貫校の出身者 7人（本人が中高一貫の指導を受けていたかどうかは未確認）

4. 学生たちの抱いていた「生徒指導」や「進路指導」のイメージ

第1時「生徒指導・進路指導とは何か」における「自己の振り返り」の結果を表1に示す。

表1 第1時「生徒指導・進路指導とは何か(1)」の「自己の振り返り」の結果

設 問	はい	いいえ	わからない	計
① 生徒指導を受けたことがある	20	6	12	38
② 進路指導を受けたことがある	37	0	1	38
③ 生徒指導に関する授業を受けたことがある	13	12	13	38
④ 進路指導の関する授業を受けたことがある	24	6	8	38
⑤ 自分の進路は自分で決めたと思っている	25	6	7	38

この結果からは、次のような学生の実態がうかがわれる。

- ・進路指導については、ほとんどの学生が「受けてきた」ととらえている。
- ・進路指導に関する授業についても「受けた」ととらえている学生が多い。設問④において「いいえ」と回答した学生は、すべて普通科のいわゆる進学校の出身者であった。進学校出身の学生は、自身の偏差値と大学の難易度を比較した個人的な指導は受けたことを覚えているが、進路全般についての授業の記憶はないと感じている。
- ・設問⑤の進路決定については、「いいえ」または「わからない」と回答している13人はすべて普通科出身者であり、専門学科あるいは総合学科出身者6人は全員が「自分で決めた」と回答している。
- ・生徒指導については、生徒指導については、約半数の学生が「受けたことがない」または「受けたかどうかわからない」と回答している。これについては、「はい」「いいえ」「わからない」のどの回答も、出身高校との関係はみられなかった。
- ・設問①、設問③の生徒指導に関する回答は、「わからない」が目立つ。これは、「生徒指導」がどういうものが理解されていないために、その指導を受けたのかどうか、あるいはその授業を受けたのかどうかを判断できないのだと考えられる。これは、この調査が生徒指導とは何かについて論じる前に実施されているため、自分が指導されたことについて、それが「生徒指導」かどうかを迷っている状態であると思われる。
- ・生徒指導のイメージを問うた第1時の学修レポートの中には、次のような記述もある。
 - ◆自分は、特に校則やルールを意識して生活してきたわけではないが、校則やルールに反するような行為をしたことはないので、生徒指導の先生から呼び出されて個人的な指導を受けた経験はない。友達の中には、生徒指導の先生から何度も呼び出され、職員室で長い時間指導を受けた子もいる。
 - ◆こわもての生徒指導の先生は、顔を見るのも嫌だった記憶がある。朝、その先生はいつも校門にいて挨拶することを強要していた。自分が挨拶しないと、「挨拶は？」と言われるのが嫌で、その先生には仕方なく挨拶していた。自分の好きな先生には、自分から

進んで挨拶していた。

- ◆中学3年生の時、学級委員を務めていた。学級がまとまらなくて、学級委員としてとても困っていたが、担任の先生の発案で11月の文化祭で学級で一つの劇に挑戦し、それを通じて一体感を持つことができた。担任の先生と一緒に、劇をよくする方法を何度も何度も話し合ったが、今から思うとあの時の担任の先生の指導は前向きの「生徒指導」だったのだと思う。

こうした記述を見ていると、学生たちが抱えていた「生徒指導」が、栗原の唱えるマルチレベルアプローチでいう「三次的教育援助」、つまり個人的なレベルであると考えられる。これとは逆に「一次的教育援助」は、教員が日常的に行う指導であるため、「生徒指導」とはとらえられていないことがうかがわれる。

5. 「学級崩壊・授業崩壊」や「反社会的行動」に対する学生のイメージ

第10時「学級崩壊・授業崩壊の現状、理解と対応」における「自己の振り返り」の結果を表2に示す。

表2 第10時「学級崩壊・授業崩壊の現状、理解と対応」の「自己の振り返り」の結果

設 問	はい	いいえ	わからない	計
① 授業中、出歩く子が多かった	9	24	1	34
② 授業を妨害する子がいた	15	16	3	34
③ 私語が多くて授業が聞こえないことがあった	16	15	3	34
④ 特定の教科あるいは教員の時、騒がしくなることがあった	23	9	2	34
⑤ 学級全体に意欲が乏しいことがあった	9	17	8	34

また、第12時「反社会的行動の現状、理解と対応」における「自己の振り返り」の結果を表3に示す。

表3 第12時「反社会的行動の現状、理解と対応」の「自己の振り返り」の結果

設 問	はい	いいえ	わからない	計
① 乱暴でけんかっ早い子がいた	27	3	3	33
② ルールやマナーを平気で破る子がいた	22	7	4	33
③ 夜間徘徊をする子がいた	10	12	11	33
④ 教員や保護者など大人の言うことを全く聞こうとしない子がいた	19	9	5	33
⑤ 飲酒や喫煙を繰り返す子がいた	16	9	8	33

文部科学省の「問題行動・不登校等、生徒指導上の課題を諸課題に関する調査」によれば、次のような傾向が見られる。

- ・小・中学校における不登校児童生徒数は、8年連続で増加しており、憂慮すべき状況を示している。
- ・小学校における暴力行為は、令和2年度は新型コロナウイルス感染症の影響で減少したが、近年大幅な増加傾向にある。中学校・高校における暴力行為は近年減少傾向にある。
- ・小中学校におけるいじめの認知件数は、新型コロナウイルス感染症の影響で令和2年度は減少したが、平成26年度以降増加が続いてきた。特にいじめの重大事態の件数は憂慮すべき状況にある。

こうした調査結果から、反社会的行動をとる児童生徒や荒れた学級の状況を目にしたり体験したりしたことのある学生は減っているとは予想していた。この「自己の振り返り」では、特にどの校種かを特定していないので、学生が回答の際にイメージしていたのが小学校、中学校、高校のどれであったかは不明である。が、こうした経験のない「いいえ」の回答数は筆者の予想を上回っていた。

また、学修レポートや感想欄等にかかれていた次のような学生の記述は、衝撃的でさえあった。

- ◆自分は、ずっと幸せな学校生活を送ってきたんだと思った。授業中に出歩いて回る子はいなかったような気がするし、授業妨害も起きなかった。これは、自分が関わった学校の先生方の努力のおかげだと感謝しなければならないと思った。でも、荒れた学級や授業を経験していないので、自分が教員になって担当する学級や授業が荒れた時、どうしたらいいのか考えられないし、それを考えると教員になるのが怖い気もする。(第10時の感想)
- ◆「乱暴でけんかっ早い子」や「ルールやマナーを平気で破る子」というのは、自分は知らない。テレビのドラマで見たことはあるが、自分たちよりひと世代ぐらい前のイメージでしかない。そういう子は、今もいるのか。(第12時の感想)

この2つの感想は、いずれもいわゆる進学校の出身者である。岐阜大学では、教育学部以外の教職課程受講生は、出身校で教育実習を実施することを原則としている。ということは、このような感想を書いた学生は、反社会的行動や荒れた学級を経験することのないまま、教員採用試験に合格すれば学校現場で教師として勤務することになる。これでは、学校現場としては困った事態となるのではないだろうか。

ただ、だからといってこうした反社会的行動や学級崩壊・授業崩壊の実態を伝えることは、ただでさえ減少傾向にある教員志望者をさらに減らすことになりかねない。教員養成に携わるものとしては、痛し痒しの状況となっている。

6. 「いじめ」に対する学生のイメージ

第9時で取り扱った「いじめ」については、メディアを通じて多くの様々な報道もあり、学生の関心も高い。第1時において「生徒指導に関する諸問題の中で気になっていること」を書かせたところ、38名中9名が「いじめ」または「いじめ自殺」と回答しており、回答数としては2番目に多かった。(1位は「虐待」15名、3位は「不登校」6名)

この第9時「いじめの現状、理解と対応」における「自己の振り返り」の結果を表4に示す。

表4 第9時「いじめの現状、理解と対応」の「自己の振り返り」の結果

設 問	はい	いいえ	わからない	計
① 学校でいじめられたことがある	6	18	7	31
② 学校で特定の子をいじめたことがある	3	23	5	31
③ 仲の良かったはずの子から陰で悪口を言われたことがある	6	13	12	31
④ SNSなどのデジタル空間で仲間はずれにされたことがある	1	27	5	33
⑤ 学級の雰囲気が良くなかったことがある	9	13	10	32

この設問は、率直には回答しづらいかも知れないと考え、提示の際に「無理に答えなくてもいい」と一言付け加えた。それもあって、回答数の合計が31, 32, 33とばらついている。しかも、この日の出席人数は39名だったので、1問も回答しなかった学生が6名いるということになる。この合計人数のばらつきや少なさは、他の授業回とは少し異なる様相となっている。おそらく、率直に回答することを避け、「わからない」でもなく「無回答」としたのではないかと推察される。

この「いじめ」についてよく言われることとして、「いじめられたことは良く覚えているが、いじめたことはあまり覚えていない」というものがある。「いじめられたことがある」に「はい」が6名、「いいえ」が18名であったのに対し、「いじめたことがある」には「はい」が3名、「いいえ」が23名という結果は、よく言われている傾向と近いものがあるように感じられる。

「いじめ」の構造^{*5}については、図4に示すように、いじめられた者（被害者）といじめた者（加害者）の関係だけでなく、その周辺にいる観衆や傍観者の存在やその責任についても言及されている。この構造については、この第9時の授業の後半で指導しているが、「自己の振り返り」は授業の冒頭で回答させており、受講生の中には自分が傍観者であったことに責任を感じているとは必ずしも考えられない。「わからない」と回答している学生や無回答の学生の中には、いじめが起きた学級にいたことで何らかの負い目を感じたということも考えられる。

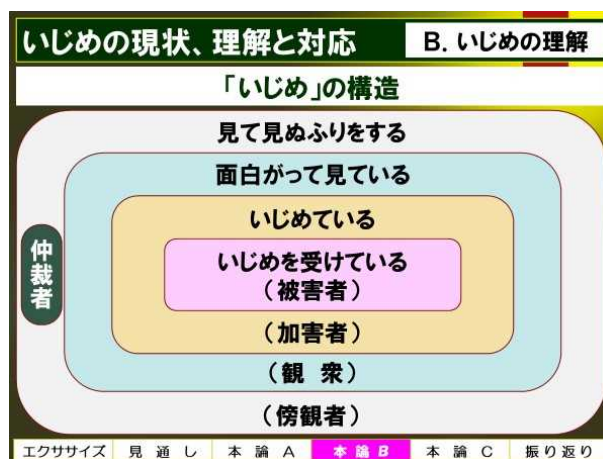


図4 第9時「いじめの構造」

なお、自由記述の中には次のようなものもあった。

- ◆中学校3年生の時、表沙汰にはなっていないが、けっこう陰湿ないじめがあった。自分はその渦には入らないようにしていたので、今日の授業でいう「傍観者」だった。だから、その時にいじめを受けていた子から見れば、自分もいじめを「黙認」している子とされていたのではないだろうか。その時にいじめる側の中心的な存在だと思われたAさんは、自分とは別々の高校に進んだので、Aさんの友達関係がその後どうなったのかはよく知らない。ところが、大学に入ったら、同じ学部・専攻の中にAさんがいた。Aさんの雰囲気は、中3のあの頃とあんまり変わっていない。なにげなく話すことはあるが、人を見下すような話し方をするAさんとは、正直のところ、これからもあまり関わりたくないと思っている。

教職課程を受講している学生であっても、当然のことながら様々な人間関係を体験している。その体験の有無や濃淡は人それぞれであるが、この受講生が指導者となった時、自分自身の体験を振り返ってみることで、集団全体を見渡した効果的な指導につながることを願っている。

7. 「自己の振り返り」全般を振り返って

これまでに取り上げた第1時「生徒指導・進路指導とは何か?」、第9時「いじめの現状、理解と対応」、第10時「学級崩壊・授業崩壊の現状、理解と対応」、第12時「反社会的行動の現状、理解と対応」以外の各授業において実施した「自己の振り返り」の設問とその回答結果を図5 (P.22) に示す。

なお、第4時「教師に必要とされる指導行動」では、筆者のミスにより、学生からの回答を残すことができなかった。また、第13～15時については、新型コロナウイルス感染症第6波の影響でオンデマンド授業としたため、「自己の振り返り」を行っていない。

これまでの取り上げてこなかった各授業での「自己の振り返り」から感じられた学生のとらえ方について、簡単に記す。

【第2時「生徒指導、進路指導とは何か(2)」】

- ・卒業した小・中・高の教育目標や校訓を覚えている学生は少ないだろうとの予想通りの結果を得られた。授業では、すべての受講生の出身高校(40名, 35校分)の教育目標や校訓について、一覧にして示したが、合い言葉的に使われている校訓については、資料提示によって様々なエピソード記憶を伴って再認され、グループワークではそれぞれの思い出話に花が開いた。

【第3時「児童生徒理解の在り方」】

- ・教職課程を履修している学生が、出身の学校において、教員との関係が良好であったことをうかがわせる結果となっている。教員についての設問では「わからない」とする回答も多く、学力以外の点で教員が自分をどのように評価していたか、という見方はしていなかったと思われる。

【第5時「生徒指導に関する法制度」】

- ・報道機関等において「校則」について話題にすることが多い中、学生たちも自分が在籍していた当時の校則については、高い関心を示した。納得がいかない校則、その校則があるために叱られた経験が語られ、感想欄にはネガティブな記述が多かった。しかし、授業の中で校則には根拠となる法律がなく、設置者や校長の判断で改訂することが可能であることを学んだことによって、生徒会活動等の働きかけの重要性が認識された。

【第6時「進路指導・キャリア教育とは】及び

【第11時「高等学校におけるキャリア教育の現状と課題(1)】

- ・進学校出身の学生にとっては、進路に関する指導は「成績（偏差値）とのにらめっこ」であり、個別的な指導が中心であったことがうかがわれる。したがって、社会に出た後の自分の生き方まで考えるキャリア教育には至っていないと感じさせる記述が目立つ。一方、農業科、工業科、総合学科の出身者では、職業体験を含む実践的な活動によって自分を見つめる指導がなされてきたことがよく分かる。

【第7時「特別支援教育と生徒指導】

- ・特別支援教育の広がりにより、きわめて多くの小中学校に特別支援学校が設置されてきていることがよく分かる。また、特別支援学校や通級指導教室は、その存在については知っていても、実際にそこに通っている児童生徒との関わりが少ないことがうかがわれる。受講生が目指しているのが高校の教員であるが、交流教育の重要性を強く感じた。

【第8時「現代の児童生徒を取り巻く諸問題】

- ・この授業の第1時の開始時点において、学生たちの関心を一番多く集めていたのが「児童虐待」であった。これは、この時期、虐待に関する報道が相次いでいたことが影響していると思われる。そこで、この「現代の児童生徒を取り巻く諸問題」の授業において、児童虐待の増加傾向を取り上げ、社会構造の変化などと合わせて論じた。授業後の感想の中に、「当たり前のことと思っていたが、自分は幸せに育ってきたんだと実感した」というものや、「自分もひとり親家庭で育ってきたが、困ったことは何一つ感じなかった」というものがあり、家庭環境や家庭教育の重要性に気付く時間となった。

8. 成果と課題

教職課程を受講する学生が、この授業の各回で扱う内容について、やがて自分が指導する立場になりことを考え、自分自身の問題としてとらえられるよう、「自己の振り返り」の設問を作成し、その回答結果を記録として残すことを試みた。

この試みにより、これまで2年間の筆者が担当した同じ内容の授業に比べ、学生が授業直後に記述する学修レポートや感想の中に、自分自身の体験に関わる内容が大幅に増えている。これは、この設問で示されている状況がそれぞれの授業のキーワード的なものであると同時に、学生自身の体験と絡み合うことが多いからであったと考えられる。

筆者の授業においては、グループワークで学生自身の体験を話す時間も設けている。その

際、この設問にあるキーワードは、学生の体験の記憶を呼び覚まし、当時の自分を客観的に見つめ直すことに結びついていたのではないだろうか。今後は、授業の冒頭において実施した「自己の振り返り」が、授業を受講したことによってどのように学生が変容したかが分かるような方法を考えてみたい。

生徒指導という機能は、日本の教育においては学習指導とならんで大きな柱となるものである。教職課程を受講した学生が、それぞれの学校生活において経験した体験を無駄にせず、自分が育てていく高校生への生徒指導の素材として役立たせられるようになることを願っている。

本来であれば、設問の在り方や回答の仕方についてなど、もっと丁寧に吟味してから実施し、回答結果について、授業中の態度やレポートの記述内容と合わせて検討し、さらに詳細な分析ができるとよいと思うが、今回の報告としてはここまでとする。

【おことわり】

受講生には「自己の振り返り」の回答について、筆者の研究に役立てることを了解してもらっている。しかし、この論文の中で引用している感想や学修レポートについては、了解を得ているわけではない。したがって、できる限り個人が特定されないような形で、内容を変えない程度に原文を改変している。

◆ 引用文献

- * 1 「生徒指導提要」 文部科学省 2010年3月 教育図書
- * 2 「生徒指導と進路指導の理論と実際」 河村茂雄 2011年4月 図書文化
- * 3 「生徒指導と進路指導の理論と実際―改訂版―」 河村茂雄 2019年2月 図書文化
- * 4 「マルチレベルアプローチ だれもが行きたくなる学校づくり 日本版包括的生徒指導の理論と実践」 栗原慎二 2017年10月 ほんの森出版
- * 5 「いじめの構造 なぜ人が怪物になるのか」 内藤朝雄 2009年3月 講談社現代新書

図5 「生徒指導と進路指導」における「自己の振り返り」回答結果

時	テーマ・キーワード	設問	はい	いいえ	わからない	合計
第1時	生徒指導、進路指導とは何か(1) ・生徒指導とは？ ・進路指導とは？ ・教育実践の日米比較	①生徒指導を受けたことがある	20	6	12	38
		②進路指導を受けたことがある	37	0	1	38
		③生徒指導に関わる授業を受けたことがある	13	12	13	38
		④進路指導に関わる授業を受けたことがある	24	6	8	38
		⑤自分の進路は自分で決めてきたと思っている	25	6	7	38
第2時	生徒指導、進路指導とは何か(2) ・生徒指導概要 ・生徒指導リーフ ・学校教育目標 ・マルチレベルアプローチ	①自分が卒業した小・中・高の教育目標や校訓を覚えている	13	23	1	37
		②自分が卒業した小・中・高では全校で取り組む行事があった	36	0	1	37
		③自分が卒業した小・中・高には全校が守るルールがあった	29	3	5	37
		④自分が卒業した小・中・高の先生は、困った時に相談できた	22	8	7	37
		⑤自分が卒業した小・中・高には何でも相談できる仲間がいた	25	10	2	37
第3時	児童生徒理解の在り方 ・日常観察 ・個人情報 ・チーム学校 ・ケース検討会議	①自分のことをよく理解している先生がいた	19	5	10	34
		②自分の周辺になんとなく行動の気になる子がいた	23	7	4	34
		③自分が卒業した学校の先生は先生同士で仲が良かった	22	1	11	34
		④自分が卒業した学校の地域は学校の指導に協力してもらえた	17	3	13	33
		⑤自分、自分の周辺の子で、個人情報漏れたことがあった	12	9	12	33
第4時	教師に必要とされる指導行動 ・教師たる者、五者たれ ・リーダーシップスタイル ・PM理論 ・教師の勢力資源	①大声でどなり散らすなど恐怖心を抱かせる先生がいた				
		②特に強い指示はないけれど、ついていきたい先生がいた				
		③成績や進路のことで圧力をかける、いばった先生がいた				
		④授業がとてうまく、難しいことを分かりやすく話す先生がいた				
		⑤自分の気に入った子にだけ声をかける先生がいた				
第5時	生徒指導に関する法制度 ・法体系 ・校則とは？ ・校則の法的根拠 ・懲罰と体罰	①校則がとて細かく、納得できない内容があった	13	21	5	39
		②校則がゆるやかで、あるのかないのか、よく分からなかった	9	26	4	39
		③在学中に、校則が変更になったことがある	12	27	0	39
		④学校の先生から、こっぴどく叱られたことがある	17	19	3	39
		⑤学校の中で、体罰が問題になったことがある	10	21	8	39
第6時	進路指導・キャリア教育とは ・少子高齢化と労働力人口 ・バブル期、就職氷河期 ・フリーターとニート ・教科教育におけるキャリア教育	①中学卒業後すぐ就職した子がいる	11	15	14	40
		②高校卒業後すぐ就職した子がいる	28	5	7	40
		③就職したがすぐ離職した子がいる	8	15	17	40
		④離職したが、再就職のため頑張っている子がいる	6	12	22	40
		⑤離職した後、何もしないでぶらぶらしている子がいる	2	15	23	40
第7時	特別支援教育と生徒指導 ・特別支援学校、学級、通級指導教室 ・発達障害と愛着障害 ・児童虐待 ・ユニバーサルデザイン教育	①特別支援学級はありましたか	37	1	1	39
		②身近に特別支援学校に通学している子はいましたか	14	18	7	39
		③通級指導教室はありましたか	16	7	16	39
		④身近に通級指導教室に通級している子はいましたか	15	10	14	39
		⑤身近に「発達障害」と診断されている子(人)はいますか	13	9	17	39
第8時	現代の児童生徒を取り巻く諸問題 ・形態別世帯数 ・ジェンogram ・自己否定感 ・ヤングケアラー	①主たる職業が第一次産業(農林水産業)の子がいた	14	16	4	34
		②放課後は学童保育で過ごす子がいた	30	4	0	34
		③三(四)世代同居家庭の子がいた	27	2	5	34
		④ひとり親家庭の子がいた	22	7	5	34
		⑤近所づきあいをほとんどしない家庭があった	12	7	15	34
第9時	いじめの現状、理解と対応 ・いじめの基本認識 ・いじめの構造 ・過去のいじめ事案 ・いじめ防止対策推進法	①学校でいじめられたことがある	6	18	7	31
		②学校で特定の子をいじめたことがある	3	23	5	31
		③仲の良かったはずの子から陰で悪口を言われたことがある	6	13	12	31
		④SNSなどのデジタル空間で仲間はずれにされたことがある	1	27	5	33
		⑤学級の雰囲気が悪くなかったことがある	9	13	10	32
第10時	学級崩壊・授業崩壊の現状、理解と対応 ・学級崩壊に至るメカニズム ・学級集団の構造 ・現職教員による原因認識 ・組織的対応	①授業中に出席く子が多かった	9	24	1	34
		②授業を妨害する子がいた	15	16	3	34
		③私語が多くて授業が聞こえないことがあった	16	15	3	34
		④特定の教科あるいは教員の時、学級が騒がしくなった	23	9	2	34
		⑤学級全体に意欲の乏しいことがあった	9	17	8	34
第11時	高等学校におけるキャリア教育の現状と課題(1) ・キャリアパスポート ・課題研究とインターンシップ ・地域資源 ・キャリア形成	①ほとんどの生徒が大学等に進学した	28	5	2	35
		②進路について考える授業が計画的に行われていた	25	7	3	35
		③進路の選択肢がたくさん示されていた	21	7	7	35
		④進路を実現する様々な支援があった	27	3	5	35
		⑤今の生活は充実していると思う	26	0	8	34
第12時	反社会的行動の現状、理解と対応 ・少年非行 ・暴力行為、校内暴力 ・反社会的行動の推移 ・組織的対応	①行動が乱暴でけんかっ早い子がいた	23	7	3	33
		②ルーツやマナーを平気で破る子がいた	22	7	4	33
		③夜間徘徊をする子がいた	10	12	11	33
		④教員や保護者など大人の言うことを全く聞こうとしない子がいた	19	9	5	33
		⑤飲酒や喫煙を繰り返す子がいた	16	9	8	33
第13時	非社会的行動の現状、理解と対応 ・不登校と中途退学 ・ひきこもり ・不登校対策 ・価値観の多様化	①学校に登校しない子がいた				
		②高校を中退した子がいた				
		③学校には登校するが、校内の相談室などで過ごす子がいた				
		④修学旅行などの行事の時だけ集団活動に参加する子がいた				
		⑤卒業後、引きこもりになった子がいた				
第14時	高等学校におけるキャリア教育の現状と課題(2) ・キャリアアダプタビリティ ・ライフラインチャート ・社会人基礎力チェック ・内的キャリア					
第15時	キャリア形成に関する諸問題 ・キャリアアンカー ・自己理解の力 ・基礎的汎用的能力 ・組織的対応	①夢や希望を明確に持っている				
		②自分の「良さ」や「課題」が自分でよく分かっている				
		③実現するかどうかは別にして、進路について見通しがある				
		④今後の進路について相談する先生、先輩、仲間がいる				
		⑤今の生活は充実している				

筆者のミスにより、
回答の記録なし

新型コロナウイルス
感染症第6波の影響
によりオンデマンド
授業としたため、
回答の記録なし